
僕を助けて

堀川 まみ

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

僕を助けて

【Nコード】

N8880B

【作者名】

堀川 まみ

【あらすじ】

クラスで独りだった少年。いじめさえ越えた無、の存在。いてもいなくても同じ。だれも僕を一人の人間として見てくれない。そんな苦痛の中、少年は生きていた。いや、心は既に死んでいた。そんな、ある日、少年の中の怪物が目覚めます。家庭内暴力。母親から死んでいい、と言われた少年の選んだ道は。

世の中なんてどうでも良かった。自分以外が生きようと死のうと・
・いや、自分さえも死んでもいいと思っていた。

将来なりたいもの……なし。

夢………楽に死にたい。

僕は……どうして生きてるの？

「よう、昨日あれからどうした？」

「3面クリアしたぜっ！超々難しかったけど、達成感あるよなあ」
クラスメートの楽しそうな声が教室に響き渡る。

でも、誰も僕には話しかけてくれない。僕は、この教室の中で独
りだ。本当に独り……。

何故、僕はここにいるんだろう？いなくても誰も困らない。誰も
悲しまない……？

寂しい。

悲しい。

悔しい。

悔しい！悔しい！！悔しい！！！！

「あら、帰ったの？帰ったら『ただいま』くらい言いなさい」
母親が言う。

「疲れた」

「そればかりねえ。若いのに、どこか悪いのかしら……？」
違う。疲れたのは『苦しい』から。

『つらい』って言えないから変わりに『疲れた』って言っているだ
け。

僕を助けて

だれか、僕を助けて!!
部屋から出たくない。
人と会うのが怖い……。
僕は駄目な人間なの？
僕は生きていちゃ駄目なの？
僕は……。

微熱が続く。

身体がだるい……。

「学校、休む？」

母親の心配そうな声に僕は無理をする。

「大丈夫。」

そう、身体は大したことないんだ。身体は……。

学校の門。ここからまた、戦いが始まる。孤独との戦い。

「お早う。」

女子の明るい声。僕には向けられない笑顔。まるで、僕だけが時間が止まっているみたいなお光景。僕以外が幸せな光景。

教室のドア。これがまた恐怖。

なるべく気づかれぬようにドアを開ける。でも、一瞬皆の視線が僕に集まる。

でも、それは一瞬の出来事で誰も僕に挨拶してくれる人はいない。僕は心の中で「お早う」と呟き、教室に入る。僕の机に座る。さあ、授業の始まりまで何をしていよう。教室は話し声で賑やか。僕の好きな愛璃ちゃんの笑い声が微かに届いてくる。僕は少し幸せになった。教科書を机の上に出して、先生を待つ。暇なので、パラパラと教科書をめくる。これが他人には、「優等生ぶって」と写るらしい。

僕は別に優等生になりたいわけじゃない。他の子と同じにくだらないお喋りに夢中になったり、授業を抜け出したりしてみたい。

ただ、・・・僕には『友達』がいないだけ。
僕と他の子の違いは、ただそれだけ。

「お早う」

先生がやっと来た。

少しホツとする。

可笑しい？だって、授業中はみんな『一人』だから。

お昼休み。

皆、それぞれグループをくんでお弁当。

僕も必死に仲間に入れて貰う。はじっこに、話しには入っていないけど、取りあえずグループに同情で入れてもらう。先生に『独り』だと思われたくないから。嫌われてると、思われたくないから。僕は必死だ。お弁当の味なんか分からない。

作り笑顔。

ちよつと、胃が痛い。

でも、我慢。だって形だけでも『仲間』といると、思われたい。

4

放課後、僕は必死で一緒に帰る友達を捜す。

でも、皆なんだかんだ理由をつけて断られる。結局、今日も誰もいなかった。僕は一人、下校する。

周りはまた、賑やか。

僕は、独り。

疲れたなあ・・・いつまで続くんだろう。こんな毎日。

いつまで、必死に生きなければいけないんだろう・・・？

僕はだんだん狂っていくような気がする。だんだん・・・『怪物』
になっていく・・・。

僕を助けて

やっと家に着いた。玄関を開け黙って中に入る。

「ただいま、は？」

母親のいつもの叱咤。

いつものことなのに、今日は無性にイライラする。

「うるさい……」

小さな声で反抗する。母親には聞こえなかったようで、

「帰ったら、ただいまくらい言いなさいって、いつも言ってるでし

よっ?」

「うるせえー、ババア!」

母親はビククリした顔をしている。

いつもの小言なのに。

いつものことなのに、僕は僕を止められなかった。

「いつもいつもうるせーんだよっ!」

叫びながら、僕はサイドボードの上にある電話や花瓶を片っ端か

ら放り投げる。

止まらない。

止められない。

「うわあああー!」

誰か、僕を助けて……。

「お、お早う……」

ビクビクした母親の声。僕は無言で椅子に座り、パンをかじる。

これから、また学校だ。お腹が痛い。

「目玉焼き、食べる?」

ギロツと僕が睨むと、

「あ、朝からそんなには食べられないわよね」

と、慌ててキッチンに引っ込む。

まるで、腫れ物に触るようだ。

母親でさえ、僕の気持ちを理解してくれない。

昨日、父親が帰ってから三人で話し合った。父親は、何故こんな事をしたのか、と僕に聞いてきた。でも、僕は答えられなかった。

何故、そんな理由が分かるなら最初から『言葉』にしている。分

からないんだ。僕自身。ただ、この心の辛さを誰かに分かって欲しい。僕を好きになつて欲しい。苦しみから、解放して欲しい。

母親は泣いた。

『どうしてあんたが泣くの？』

僕はまるで他人を見るように泣いている母親を見ていた。

泣きたいのは僕なのに。

助けて欲しいのは、この僕なのに。どうして自分が被害者だ、と言わんばかりに泣くの？

卑怯だよ。

「こんな子に育てた覚えはないのに・・・」

僕だつて、あんたなんか育てられた覚えはない！

「とにかく、母さんを悲しませる様な事をするんじゃない」

「何がだよ！俺が何したつていうんだよっ！！」

「家庭内暴力を起こしただろう！！」

父親も声を荒げる。

「止めて、近所に聞こえる！あなたの家の息子が喚いてる、つて！住めなくなるでしょ！！」

母親が泣きながら僕と父親を止めに入る。でも、それは世間体の為。自分の為。決して、僕を心配しての事じゃない・・・だから、余計腹が立つ！！

「ざけんじゃねえー、くそババア！周りに知れたからつて何が悪いんだよ！！いつも、いつもめてめえの事ばかりで物言いやがつて！」

「いいかげんにしろっ！母親に向かって何て口の利き方してるんだ！！」

父親が激怒する。

お父さんは怖い。でも、・・・もう生きているのが辛いんだ・・・。

「じゃあ、死んでやるよ！俺がいなきや世間に恥、さらさないんだろっ！！」

「そんなこと言つてねーだろっ！！」

「死んでやる!!」

僕は鞆からカミソリを出した。

死にたくて、でも、死にたくなくて、ただカミソリを鞆に入れている。そうしていると落ち着く。心が痛いとき、手首を切る。

死なない程度に。心の傷を身体の傷でごまかす。

本当は『助けて』の印。

でも、母親は知ってか知らずか無関心。

「僕なんか生きてもしようがないんだあ!!」

「やめろっ!!」

父親が必死で止めようとする。

けど、母親は、

「死にたければ、死ねば。ここまでしてあげてもう、私、疲れた。

死にたいなら、どうぞ」

「お前は黙ってる!」

父が母を怒鳴りつける。

そう、それ母親の本音だ。

僕は・・・母親に・・・愛されてなかったんだ・・・。

「ふっ・・・ううう・・・」

涙が止まらない。

自分を生んだ親に「死んでどうぞ」と言われたんだ。

父は力づくで僕からカミソリを取り上げる。

それから・・・会話は延々続いた。ポツリ、ポツリと話していると

思うと、また、大声で喚き合う。そんな、繰り返して朝が来た。

僕は終始無言で朝食を食べ終わると、そのまま黙って玄関を出た。

「いつてらっしやい」

母親の声が背中に話しかける。世間体を気にしてのこと。昨日は

何でもないのよ。ほら、もう普通でしょ?

そう見せびらかしたいだけ。

くだらない。

大人の世間体なんて、なんてくだらないんだろう。
僕のこれから味わう『地獄』に比べたら、天と地程の差だ。
『学校』という地獄の門を、僕はまたくぐり抜ける。

体育の時間。

「今日からは、グループに分かれて創作ダンスに入る。皆、6〜7人で好きなもの同士グループを作れ」

脳天気な先生が言う。

どうして、先生がグループ分けしてくれないのだろう。『友達』がいる人はいい。さぞや楽しい授業になるだろう。でも、僕みたいな人間には……。

「僕も入れて」

「悪りーい、もう人数一杯になっちゃったんだよ。他、当たってくれよ」

「僕も入れて」

……同じ事の繰り返し。

先生、どうしてこんな酷い仕打ちをするの？僕はますますこのクラスに僕なんか『必要ない』って実感させられるんだよ！？

「なんだ、西崎余ってるのか？おーい、そこ誰か西崎入れてやってくれ」

「いいですよ」

優等生がすぐに返事をする。僕が頼んだ時は「だめ」って言ったのに、先生には『よい子』を見せたいもんね。

僕はとても惨め気持ちになった。

地獄。

学校は『地獄』

この世は『地獄』

僕はどうして生まれてきたのだろう？

何億の精子の中で、どうして僕なの？他の精子が頑張ってくれれば良かったのに。

僕を助けて

僕は・・・、この世に生まれてきたくなかった！！

それから、しばしば母親と喧嘩した。僕は勇気がないから物にあたる。トイレのドアを壊し、物を投げつけ、狂ったようにドアを蹴飛ばす。

ある時は、「死ぬ」と紙に書いてそれを部屋の真ん中に包丁で突きつけた。

会社から帰った父がまるで泥棒に入られた後のような部屋を見て僕を呼びに部屋に来る。

僕が「嫌だ！」と言つと、

「いいから、来い！！」と父に怒鳴りつけられ、怖くて仕方なく下に降りていく。

そこには恨めしそうに僕を見る母親がいた。

「私が何したつていうの？そんなに私が憎いの？」

父が帰ったとたん、強気に出る母。そんな母親がム力ついてム力ついて仕方がない。

「このままだと、私この子に殺される！」

母親が叫ぶ。

わざとらしい。

だから、僕はお前が嫌い。近所の人には愛想を振りまいて、家に一歩入ればこれだ。女は裏表があるから、皆嫌いだ！

女だけじゃない。

男だつて、先生の前じゃいい子ぶる。

そんなクスばっかの世の中。自分保身主義者。

くだらない。

嫌いだ・・・。

次の日、父は会社を休み僕を病院へ連れてつた。

長く、長く話し合った末の結果だ。

僕自身、限界だった。このままじゃ、本当に母親を殺してしまい

そうだった。それほど、・・・憎かった。

どうしてだか、憎かった。

僕を生んだはずの母なのに・・・。僕の事を何一つ、理解しよう
としない母だったから・・・。

壊れた心は、もう、元には戻れなかった・・・。

「初めまして、澄田といいます。まずは西崎君の今の気持ちを聞か
せて下さい」

「・・・助けて欲しい・・・」

僕はぼそつと言った。

「具体的に、何を助けて欲しいですか」

「・・・僕は、ずつと独りでした。小学校も中学校も、友達が出来
なくて、母親は僕が我が儘だから、つていつも言つて、でも、それ
が苦しくて、自分が悪いならどうかしようとして、でも、どうに
も出来なくて僕は皆に嫌われて、もしかしたら生きていちゃいけな
いんじゃないか、つて思うようになって・・・僕はおばあちゃん
子だったから、祖母が生きている間は僕は死んじゃいけないと思っ
てた。

「それはどうして？」

先生は僕の話しをじつと聞いてくれた。そして、時々質問してく
る。

「おばあちゃんにとつて、僕は生き甲斐だから。だから、僕は必要
とされてるから、死んだらおばあちゃんが悲しむから・・・」

「おばあちゃん思いの優しい子なんですね」

僕はちよつと嬉しかった。母は祖母に嫉妬していて、僕をそんな
風に言ってくれた事はなかったから。祖母は僕の尊敬するたった一
人の人。祖母が生きている時から母はよく「おばあちゃんになんか
稟を任せるんじゃないか」と良く口にしていた。自分は仕事と休
みの日には近所の人と遊び歩いて僕の事なんか、放つたらかしたっ
たくせに・・・。

僕は祖母に育てられた事を誇りに思ってる。

昔も、そしてこれからも、ずっと……。

「ずっと、頑張ってきたんですね」

先生の言葉で、僕は今までずっと我慢していた心が涙となって溢れ出した。それは、僕が怪物から人間の心を少し取り戻したのかも知れない。

「僕は、辛かった。本当に辛かったんです。人に嫌われる。なんだろう、とずっと考えても分からなくて、意地悪されて相手を憎んで……殺したかった。でも、落ち込むと僕自身が生きていちゃいけないのかも、と思つて手首を切つて。でも、僕は本当は死にたくなくて、親に分かつて貰いたかった。でも、母親は近所の人にはかり目を向けて僕の事は全然理解しようとしなかった。それどころか死にたければ死んでいい、とまで言つて僕は母が憎い」

僕はボロボロ泣きながら話した。つつかえつつかえ、僕の長い長い年月を理解して欲しくて、この最後の綱の澄田先生に語つた。

「そう。お母さんも本音ではないと思うけど、言つてはいけない事ですね」

僕の話しは2時間近くにも及んだ。それでも、先生はずっと聞いてくれた。それは、仕事だから当たり前的事なのかもしれないが、今の僕には『話しを聞いてくれる』たったそれだけの事が嬉しかった。

そして、延々に続いた話しの後、先生は僕の目を見て言った。

「これから、西崎君と一番良い方法を一緒に考えていきましょう。

その前に、一つだけ、約束して欲しい事があります」

僕は先生をじつと見た。何を言うのだろうか。難しい事？ 厳しい事？ 僕に出来る……？

「今後、決して手首を切るような事をしない、と約束して下さい」

僕は自信がなかった。

「約束、できますか？」

それは、強制ではなかった。僕の意志を聞いてくれていた。

だから、僕は、
「はい」

と頷いた。自信はなかったけど、でも僕はこれから治療、して行きたいから。僕の未来を、取り戻したいから・・・。

「これから、辛いことは一緒に考えていきましょう。直ぐには結果は出ないかもしれないけど、一人で悩まないで長い目で見ていきましょう」

そして、長い長い治療が始まった。

投薬、カウンセリング。

あれから、5年の月日が流れた。

僕はまだ、治療に通っている。完治する事はないのかもしれないけど、僕は今も生きている。

時々、鬱になると僕が生きていると人の迷惑になるかも、と思っ
てしまう事もある。人に嫌われるのが怖くて、家に引き籠もりたくもなる。

でも、人よりゆっくりだけど僕は歩いている。健常者と同じ速度では歩めないかもしれないけど、僕は僕のままでもいいから。落ち込んで、泣いて、でも時間を見方につけて僕は生きています。

だって、僕には先生がついていてくれるから。

もう、独りだった頃の僕とは違う。

精神科に通ってる。

まだ、偏見の目で見られるのが怖くて人には言えないけど、それでいい。

だって、先生やカウンセラーの人達のおかげで、僕はちゃんと生きていくから！

僕を助けて

(後書き)

最後まで、読んで下さりありがとうございます。これは、あくまで一つの選択です。世の中には幾つも選択肢があります。でも、心が弱っている時、無理に自分で選ばないで下さい。あなたはあなたのままで良いのだから。

僕を助けて

僕を助けて

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

PDF小説ネット発足にあたって

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8880b/>

僕を助けて

2008年11月7日09時18分発行